

乾燥と湿潤と

— 文明論的に —

吉 田 光 邦

西アジアは巨大な乾燥地帯である。それは西はアフリカへつづき、東は中央アジアからさらにモンゴルに至るひろがりをもち、世界最大とさえいわれている。この乾燥とは一言でいえば降水量が少ないことである。事実イラン高原を1例にとれば、降水の多い月でも毎月降水量が20 mmにみたない。そこで植物の成育に必要な水分は絶対的に不足することとなる。従ってこれらの地域は、そのほとんどが砂漠、半砂漠、或いは乾いたステップを形づくっている。

この巨大な乾燥地帯に対して、アジアにはいまひとつの極端な自然がある。それは熱帯の多雨に養われる、南アジア、東南アジアの湿潤地帯である。乾燥地帯が砂漠またはステップであるのに対し、この地域はうっそうたるジャングル、またゆたかな耕地でおおわれている。その雨量はマライの1例をみれば、マライ半島の東海岸では、平均300 mmの降水量があり、西海岸では200 mm内外という数字である。最も雨が多いといわれる西海岸よりやや内陸に入ったタイピン地方では580 mm、雨が少ないといわれるネグリ・スンビラン州ですら175 mm程度となっている。

この豊かな降水に加えて熱帯性の高温がある。海岸地方の日中気温は平均32°Cぐらいい、夜間も21~24°C内外とされる。標高約1600 mのカメルン高地でも28°Cの数字が記録される。尤もこの地では時には10°C以下の温度に達することもある。

この高温と多湿の条件は、植物をゆたかに成長させ、その結果全土をおおう深い森林を形成することになる。乾燥世界のイランでは、国土の全面積中約70%が砂漠、山岳地帯などの不毛の地となっている。ところがマライにあっては、ネグリ・スンビランでは全土の41%が森林であり、マレーシア全体では森林は26.1%と計算されている。しかもこれに加えてほとんどジャングルと同様の姿を示す広大なゴム園地帯がある。全ゴム園は現在約400万エーカーといわれ、国土の12%をおおう。即ち全土の約38%の地域は森林とゴムの緑の世界ということになる。

乾燥と湿潤と

森林とゴム園の世界，それは一見すれば，生命にみちた世界であり，生のエネルギーに充実した世界とみることができよう。しかし実は深い森林，近代的な土木機械が立ち入ることすらも困難である密度の高い森林帯は，生に充実した外観を呈しながらも，実は不毛にひとしい。それは砂漠と同じように人間の開発，人間の侵入をかたくこぼんでいる世界である。いささか開かれた道も，たちまちのうちに雨と高温によって，ふたたびジャングルと化してしまう。砂漠が完全な虚無，ほとんどの生命の存在を許さぬ，虚しい空間であるとすれば，湿潤地帯のジャングルは，一見，強い生命にみちみちているようにみえていながら，実は砂漠と同じく人間にとっては虚しい空間なのである。無数の生命が存在しつつも，なお無なるもの，それがジャングルによって代表される湿潤世界の空間の姿であるといわねばなるまい。いわば極端な乾燥によって生れた砂漠の世界は，極端な湿潤によって生まれたジャングルの世界と同じことなのである。

砂漠のなかにはオアシスが存在する。オアシスはいうまでもなく，水を中心として生れた人間の生活の空間である。オアシスの広がりはいつも水の量によって規定される。すなわち供給される水量の函数として，オアシスの性格も大いさも決定されてしまう。オアシスを広げ，人間の世界を拡大する方法は，灌漑方式の開発しかない。イランなどのカナート，或いは現代のダム建設による灌漑用水の集中などは，すべてオアシスを拡大させ，砂漠を開発する技術であった。

一方湿潤の世界にあっては問題はすべてこれと反対になる。余りに豊富すぎる水，そこでその水をいかに適当に排水し，かつ農業に適合した灌漑に転化させるかが，第一の命題である。「ジャングルはひとつの巨大なスポンジのようなものである」とマレーシアの年鑑では述べられている。この大きな水をふくんだスポンジは，適当にさえ扱えば，徐々に水を流出させるすぐれた貯水源であり，農業を十二分に発展させる能力もっている。しかしその取扱いを誤れば，この巨大なスポンジは大洪水をひきおこし，土地のエロージョンによる荒廃という結果を生んでしまう。

この意味でゴム園によるジャングルの開発というのは，マレーシアを例とすれば，まことに見事な開発の成功であった。400万エーカーに及ぶマライ半島のゴム園は，ジャングルをゴムの樹のジャングルに置きかえたものにすぎない。高温と多雨によって密生するジャングルが，有効な商品作物のジャングルに置きかえられたわけである。

しかし奇妙なことに，このゴムとマライとほとんど同意語になっているほどのゴム園の歴史——1961年には80万トンのゴムが輸出された——は，比較的新しいことなのである。ゴムがその原産地の南米から東南アジアに移植されたのは，前世紀の終りのころ

である。最初はブラジルからインドに移されたが、これは失敗に終わった。ついでセイロンとマライに移された。1876年のことという。まずロンドンのKew植物園で7万の種子が育てられて2800株の苗が得られた。そして翌77年、22株がシンガポールの植物園に移植され、9株を残して他はマラッカなど各地に移された。しかし他のものはすべて枯死し、シンガポールのゴムの苗のみが生き残った。この9株の苗が現在のゴム園の祖先なのである。

この成績にかんがみ、1895年には最初の企業的ゴム園の経営がはじまっている。英国資本と華僑資本の合弁による「聯華橡膠有限公司」がそれで、まずシンガポールに4000エーカーのゴム園を開いた。企業は順調に成長をつづけた。これ以後は加速度的にゴム園は増加し、今世紀はじめにははやくも5万エーカーが作付けされ、1910年代には10万エーカーとなり、ついに現在に及んだのである。それはRidley, Hislop Hillsなどのイギリスの植物学者たちと、陳齊（聚）賢などの機を見るに敏な華僑資本の合作によって生れた、みごとなジャングル開発の成功例なのである。ジャングルの内容の質的な転化——それは乾燥地帯に惜しみなくふりそそぐ太陽エネルギーをいかに転化するかと同じ問題であった。

さて西アジアのオアシスにおける穀物生産の大部分は畑作による小麦作である。小麦はもともと乾燥地帯の植物であることからいって、それは当然の事である。そこでは一種のDry Farmingが行われたり、高地に降った雪どけ水を利用した灌漑が行われる。イランの穀倉といわれるアゼルバイジャン地方の灌漑は、主として天水と雪どけ水によっている。また地表を流れる水は蒸発量が大きく、水の損失が多いので、これを防ぐために名高いカナート、すなわち地下水道による灌漑が行われるのも、乾燥地農業の大きな特質である。いえば絶対的に少ない水分を、いかに利用し、いかにたくみに保蓄して用いるかに、乾燥農業の技術の根本的な問題があった。

これに反して湿潤地の農業はいうまでもなく、水田による稲作が中心となる。もともと熱帯性の植物である水稻にとって、マレーシアのような十分な日照量とゆたかな水は天与の好条件である。しかしさきにも述べたように巨大なスポンジのごときジャングルをもつその地は、むしろいかにその水をもって有効な灌漑を行なうかが問題である。そのためにはこの大きなスポンジに対抗しうるだけの、全体的な灌漑体系の成立が必要である。かつてのマレーシアの支配者であったイギリスは、はやくからこの面に注意した。その最初のもは、今世紀のはじめに完成されたKrian Irrigation Schemeと

乾燥と湿潤と

呼ばれるもので、北部 Perak の約5万エーカーにわたる稲作地帯をカバーするものであった。この伝統は今日もそのまま残っており、The Drainage & Irrigation Dept. がこうしたプランの作成と実行につとめている。湿潤地帯の農業では、いかに大量の水をたくみに制御するかが第一の命題だったのである。

このような自然環境や生産の差異はそのまま、生活文化の面においても著しい差異となって現われてくる。イランのオアシスの村と、マレーシアの水田地帯のカンボン（村落）の暮しをざっとならべていってみよう。まず住居は、前者は日干し煉瓦を積みあげて壁体をつくり、その上に丸太をならべて天井とし、さらに土でおおって屋根にしたものである。窓面積は小さく採光量は乏しい。しかしきびしい暑熱の空気から隔絶された薄暗い屋内はひいやりとして涼しい。そして床面にカーペットなどを敷いて床面生活がいとなまれる。

植物に乏しい乾燥地帯の建築材料がしぜん土を利用することになるのに反し、マレーシアのカンボンの住居は、完全に木造である。それは日本の家屋のように柱を中心として構成され、それに板壁をとりつける。屋根は雨水を流し去るために当然急な勾配をもつものとなる。乾燥地帯はほとんどこの問題がないから、何れも扁平な陸屋根形式となっている。

また湿潤を防ぐために高床式の床が一般であり、高さは1.5~2 mにも及ぶ。そして前面には多くはひろいテラスをもち、窓も大きくとられてきわめて開放的であり、室内は明るい。ただ窓はいずれも厳重にドアがつけられており、水分の屋内への侵入や、直射日光を防ぐ用意は十分になされている。マレーシアでも東海岸にはニッパ椰子の葉でふいた屋根を多くみるが、西海岸地方では板屋根、或いはトタンぶきのものが多い。ただマレーシアでは、中国人、インド人の住居は床面式となっており、かれらが故国の生活様式をそのまま伝えてくずしていないことは注目すべきであろう。

オアシス農民の食事は小麦と羊である。即ち小麦は小麦粉にひかれてパン形式の食物となる。蛋白質と脂肪の給源はもっぱら羊と鶏にたよらねばならない。尤もこれはイスラムの戒律による生活規制の結果ではあるが——。そしてマライのカンボン農民は、いうまでもなく米飯とカレーである。そして同じくイスラム教であるために、蛋白や脂肪源は、羊、鶏、たまに水牛が用いられる。ただ Oil Palm の利用による植物性油脂の利用が、オアシス系とは異ったものとしてめだっている。がいずれも香辛料を豊富に用いて刺戟性のつよい調味をすることは、ともにきびしい暑熱にさらされつつ生活するものの当然の反応なのであろうか。

次に衣服の面についてみよう。オアシスの人たちはふつうゆったりと長い上衣、これにズボンをつける。男女ともその基本形は変わらないツーピースである。ゆったりと広いことは暑さに対する当然の姿である。カンボンの人たちもこの点は全く同じである。ただズボンの代りにこれも周知のサロンが用いられる。ツーピースではあっても、これは一層単純でしかも暑熱に対して涼しい服装である。しかし非活動的となることはまぬがれない。

こうしてオアシスの生活、カンボンの生活を比較してながめてゆくと、そこには生活態度の著しい差異が生れている。ゴム園によるジャングルの開発が象徴するように、水と植物にあふれた世界での生き方は、つねにそれにどのように適応し、順応して生きるかが問題となる。きわめて粗放的な水稲作であっても、ある一定のレベルの生活を充すには十分な生産が、天恵によって保証されている。杓水稲のみではない。椰子、バナナ、どれもほとんど手入れらしい手入れをせずとも、果実は熟し、人間の食欲を十分にみたしてくれる。それ以上の労力を注ぎこんで、多くの生産量を得たとしても、それがなんの意味をもつのであろうか。

これに比べてオアシスの農民は、常に水の欠乏にさらされている。カナートという地下水道の知恵も、あくことない水の追求によって生れたものである。いつも絶対的な欠乏の生に立ちながら、彼等は水を求めて、乾燥と砂漠に抵抗し、挑戦せねばならない。カナートも、運河もたえず補修し、たえず改良してゆかねば水はやってこない。それを怠ればそれはオアシスの衰滅、人間の滅亡を意味するのである。そうした緊張と努力の上に、オアシス農民の生活はきずかれている。

この緊張した努力の上にきずかれる世界、そこで乾燥世界の支配者はいつもこれらへのりこえた強大な権力者、専制君主たちであった。アカメニドの古代から近世のイスラム帝国に至るまで、そこを支配したのはいつも強力な専制君主だったのは、歴史が明らかに示すところであった。そしてまたオアシスの支配はオアシスをつなぐ道路の支配である。点状に分布するオアシスの村や都市を線としてつなぐ道路を支配することこそ、砂漠的世界の支配の方法であった。「神が与えし獣」といわれるラクダを駆使して、すべての交通路を独占することが帝国を完成し、帝国を支配する方法であった。しかもその道路はいつも発見されねばならなかった。隊商たちを養うだけの泉があり、しかも砂漠の少ない道である。そうした道が砂漠のなかに発見され、開拓されてゆくと、帝国の版図は拡大していったわけである。しかも乾燥という自然の性質は、一旦発見されたルートにほとんど変化を与えることなく、道は残りつづけるのであった。

乾燥と湿潤と

しかし湿潤の世界，ジャングルの世界ではそうではない。ようやくにして開かれた道も，すぐに強烈な生命力をもつ熱帯のジャングルに直ちにおおわれてしまう。ここでは道は発見されるのではなく，造られねばならぬ。人間は旺盛な植物の生命力と戦いながら道路を作らねばならなかった。そこにかつてのマライにおける小王国分立の理由がある。サルタンたちは，ささやかな世界を守りつづけることで，せいっぱいだった。自分の世界を外方に延長し，拡大しようとするならば，強烈な植物のエネルギーと戦わねばならぬ。ジャングルは彼等の城壁であるとともに，また彼等を進出させない強大な障壁でもあったのである。

だからこのジャングルのエネルギーにまさる近代科学技術の持主たちが，新しい道路を開拓し，新しい交通路線を確立したときにはじめてすべてを統一する支配者が生れたのである。それがかつてのイギリスであり，西欧の植民地経営者たちであった。1867年のペナン，マラッカ，シンガポールの占領による海峡植民地の建設以来のイギリスの侵略の足跡は，このことを物語るものである。

たとえばマライ半島では 1885 年にはすでに鉄道の建設が開始され，タイピンからポートウエルドに至る路線が開通した。これを最初として西海岸地方にはしだいに鉄道の建設がすすめられ，1918 年にはタイとの国境からシンガポールに至る路線が完全に結ばれた。シンガポールとジョホールバルを結ぶコーズウエイ 3,442 フートが完成して名実ともに半島が縦断されたのは，1923 年である。そしてゲマスからクワンタンに至る横断鉄道が完成したのは 1931 年であった。イギリスの進攻以来わずか 60 余年である。それは近代的な交通技術によってジャングルの障害が克服され，完全な植民地的統一が成功した時期でもあった。これに平行して道路網も建設され，現在でもマレーシアの舗装道路は 6000 マイル以上に及んでおり，主要道路の舗装率は 70 %以上に達している。イランの近代化につとめたレザ・シャーが，まずテヘラン，ホラムシャー間の鉄道建設を行なったことを，思い合せのべきであろう。

しかもここに主にとりあげてきた，イランとマレーシアはともにイスラム国家であることは興味ふかい。ことにマレーシアのイスラムは他のイスラム国家と異って，聖戦によって成立したものではない。それはおだやかな布教によって生れた。マレーシア最古のイスラムの遺品は今世紀のはじめ，トレガンヌ州のテレサート河畔で発見された碑文である。現在クアラルンプール博物館に置かれているが，Sri Paduka Tuban なる者によって立てられたもので，アラビア文字でイスラムの戒律を刻したものである。碑面

にはイスラム暦702年、即わち1303年A. D.の文字がみられる。

こうしたイスラムの布教事情のためか、この地のイスラムは他のイスラム圏と異って、かなり固有の法、習慣を残した社会となっていた。法典類も多くイスラム法となつて、1526年のマラッカ法典、1596年のパハン法典、1650年のケダー法典等がマレーシアの古法典として知られている。しかしこれらのなかにあるのは、純然たるイスラム法ではない。たとえばマラッカ法典には、地位、身分によって刑罰の差があり、高位のものに対する犯罪は厳重に処罰されるという規定があるという。つまりイスラム的平等は否定されているわけである。またパハン法典には360種の刑罰の方法を記し、しかもその方法はきわめて惨酷なものばかりである。また女性の姦通に対しても比較的ゆるやかであることも、イスラム法のきびしきとは著しい差異である。このようにみると、マレーシアのイスラムは、個人的な律法としては強く生きてきたが社会的律法としては、なおイスラム以前のものを相当に残したのだった。

これに反し、イランのイスラムはイスラム中の少数派であるシーア派に属することにもよるが、その姿ははるかに激越、かつ深刻である。シーア派最大の行事モハラムに示されるはげしい情熱は今日でも盛んで、中世的な宗教的興奮を思わせるものがある。

このふたつのイスラムの性格の差は、もちろんその歴史的背景に負うことが多いであろう。マレーシアのイスラムはヒンズー教を追って勢力を得たとはいえ、そこには血なまぐさい争闘はなかった。しかし同時に単に歴史的なもののみでなく、極端な湿潤と乾燥という風土的条件の差が、そうした風土のなかに生きる人たちの人生の態度に影響しているともいえるのではないか。湿潤に生きねばならぬ人たちは、いつも適応、順応のなかに生きねばならぬ。しかし乾燥に生きる人びとはいつも抵抗と発見の途に生きねばならぬ。このふたつがまた彼等の宗教の性格をも規制する一面にもなったのであろう。

以上略述してきたような自然的環境、或いは歴史的な背景のなかに、このアジアのふたつの極端な乾燥と湿潤の世界は、現代を迎えている。そしてこのふたつの一見相反するようにみえる世界は、ともにいわゆる近代化の道を歩みはじめている。その近代化、ことに乾燥地帯の近代化については、筆者はかつてイランを1例として、本誌上で論じてみたことがあるので、ここではふれない。しかしそれらがともに近代科学技術の摂取によって、新しい国家組織の形成や、工業化、また教育体系の整備につとめつつあることを指摘するにとどめよう。そしてその背後にはともに、強烈なナショナリズムが波打っていることについても同様である。

乾燥と湿潤と

ただいまでもなく近代科学はその普遍的な能力によって人間に奉仕するものであった。それはいつも人間に幸福をもたらすものとみなされてきた。しかし 20 世紀の科学は、また別の姿を示しつつある。すなわち 20 世紀のそれは、単に人間の奉仕者ではなくて、人間存在のありかたにまで食いこんできている。ではこのふたつのアジアの世界の人間に科学はどのような働きかけをもっているだろうか。

ごく卑近な 1 例をあげてみよう。それは熱帯における冷房の発達と普及である。人工的な季節の調整は 20 世紀科学文明の大きな成果のひとつである。しかもそれはいま熱帯の都市生活に、新しい面を与えつつある。つまり冷房は人間に考える時間を与えた。

いうまでもなく熱帯はほとんど季節的变化のないままに、時が推移してゆく世界である。しかもはげしい酷熱と湿潤。マレーシアでは、日中の湿度は 60 %程度であるが、日没ごろからしだいに湿度は増加して、夜明けごろには飽和に達するという。しかし人工季節の成功は、こうした不愉快な夜の睡眠を健康な眠りに変えた。

恒常的な季節；それに対応して熱帯の風景もまた変らない。四周はたえず緑である。ブーゲンビリアやハイビスカスの鮮烈な色彩もたえない。花はたえず開くとともに、たえず散ってゆく。そして人間は時のサイクルを見失いがちである。だがここに導入された人工季節、冷房の空間は、人間にとって新しい刺戟であった。そこではじめて人間は、酷熱と湿潤から逃れて、新しい生活の空間を得た。はじめて安定した気持のなかで、思考する時間をもつことができるようになった。そして自然のきびしさにさらされつつづけることから逃れることができた。いわば創造的な時間、自然に順応しつつづけばならぬ生き方から、自然を利用しようとする時間をつくることができたわけである。

事情はある程度四季が存在する西アジアの地域でも同じことである。耐えがたいほどの苛酷な自然から、人間を隔離する手段が得られた。そこで南アジアの熱帯の場合と同じく新しい人間の生きる場が生れた。

これはごく手近な 1 例でしかない。しかしそうした些事のなかにもみられるように、現代の科学技術は人間のあり方すら変えてゆくとしていく。近代化、すなわち現代の科学技術をフロンティアとする波は、もはや壮大な土木機械の活躍による単なる自然環境の改変にのみとどまらない。それは人間さえも変えてゆく。とすればこのアジアに存在する湿潤と乾燥という 2 極的な世界は、こんごいわゆる温帯アジアの文明に対してどのような文明の様相を示すことになるだろうか。普遍という科学技術の特性と、変らぬ強烈な風土のエネルギーの相関の未来こそ、注目に値するものといえることができよう。

(筆者は京大人文学研究所助教授)